

## 平和を求め—戦争時代を生きた方のお話①—

実家の仏壇の奥に古い手帳がありました。戦死した叔父(84歳の母の兄)の海軍での日記です。叔父は、呉港で、軍艦に乗っていて機銃掃射され亡くなり(25歳)、後に友人より遺骨(小指)を、届けられたと聞いていました。そのとき、一緒に届けられたものでしょう。手帳の行間から読み取れるものがあります。

私の母は、現在介護度5で、叔父のこと・戦争について聞くことはできません。

戦後62年、1894年(明治27年)の日清戦争から、日本国憲法施行の1947

年まで53年間、戦争は4回ありました。平和憲法施行後60年間、日本は戦争をしていません。

憲法9条のある意味は大きいのです。



戦争時代を生きられた嵐山町の方のお話を伺います。

大正6年菅谷村で生まれたAさん、(新聞広告の裏紙でノートを作り、ていねいな字で書かれる生活をなさるAさんを私は敬愛しています。)のお話しを伺いました。

Aさんは昭和13年小川町で兵役検査が実施されて、第一乙種合格で、4月20日に召集されました。17年にも召集され、2回中国に出征されています。

大隊本部付衛生兵だったので部隊の最前線は経験していない。

が、敵機が来襲したときは、小さな一人用の防空壕に入った。本部は敵襲される恐れが大きいので、一人用の防空壕をつくるように指示があった。身体が埋まらないように上半身は出て、身体が隠れる物陰をつくっていた。

前線にでていた人が戦死すると、戦友が遺体を持ち帰ることができるようにリュックにいれることができる身体の一部を持ち帰った。

遺体を木材などの上において、焼き、軍隊の名簿からお寺のお坊さんを捜し、坊さんが見つかった時はお経を唱えてもらい、一人一人の遺骨を確認して日本に護送した。

昭和18年6月、遺骨護送要員として、上海を出発して、大阪港に到着。大阪港の護岸に原隊や国防婦人会が多くの人が並び待っていた。

遺骨をお渡しする任務が終わると1週間の休暇をもらい、父・母に会い、又、中国指令本部に戻った。

戦後は捕虜になって、半年奉天にいた。玄米が支給されたので、びんにいれて、棒でつついて精米した。野菜はなく、原っぱでタンポポなどをとっては食べた。

昭和21年6月復員した。上海から博多港に入港。東京は空襲で焼け野原だったが、嵐山駅に降りたとき出征した時と変わらず、帰ってきたと安堵した。



兄弟3人が外地に出征し、両親は毎日、光照寺に参拝して、無事に帰るように願かけし、お茶断ちをしていた。その辛さを思うと涙があふれ出てしまった。兄弟3人とも無事に外地から帰ってきた。

私達が最後の戦争体験者として終わってほしい。